

ジョン・バチェラーの著作に含まれる 樺太アイヌの口承文芸 —ピウスツキ資料からの転載の実態—

阪 口 諒

はじめに

ジョン・バチェラー (John Batchelor, 1854-1944)⁽¹⁾ は、イギリス人のキリスト教宣教師であり、1977年に北海道を訪れて以来、1940年に帰国するまで、アイヌ人へのキリスト教の伝道の傍ら、アイヌ語・アイヌ文化の記録を行った。バチェラーはこうした資料を非常に早い時期から公刊しているが、その資料は、いつ、どこで、誰から聞いた情報なのか記載されていないなど、研究資料としては問題点が多い⁽²⁾。しかし、その資料は伝統的なアイヌ文化が日常生活に息づいていた時代に得られたものであり、その多くが今となっては得られないものである。

バチェラーの著作には、北海道のものだけでなく樺太の伝承も掲載されている。そして『アイヌ・英・和辞典』(以下、『辞典』⁽³⁾)には樺太方言の語彙が含まれていることが知られている。これらはバチェラーが樺太アイヌから直接採録したものだという可能性も考えられるが、掲載されている樺太アイヌの口承文芸、語彙を見ると、バチェラー自身が採録したものではなく、*Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* (Pilsudski 1912 以下、*Materials*) から転載されたものであることが分かる。しかし、ほとんどの場合、転載であることは明示されておらず、バチェラーの著作を研究資料として使用するためには、オリジナルな部分と、引用・転載された部分とを峻別する必要がある。バチェラーの報告自体これまでのアイヌ口承文芸研究において十分活用されてきたとは言いがたく、こうした基礎作業を通じてバチェラーの業績の価値を再認識することが必要だと言える。そこで、本稿では、バチェラーの著作に掲載されている樺太アイヌの口承文芸を対象に、どの物語が転載なのか、そして、転載である場合、いかなる点に変更されたのか検討する。

1. バチェラーによるアイヌ口承文芸の記録

本格的にアイヌ口承文芸の記録が始まるのは明治以降だが、バチェラーはかなり早い時期からアイヌ語・アイヌ文化の記録を行っている。1884年の『蝦夷今昔物語』(バチロール 1884)には、早くもアイヌ語による短い物語と、その日本語訳が掲載されている(29-

30丁)⁽⁴⁾。1888～92年には *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に “Specimens of Ainu Folklore” (Batchelor 1889-1893)⁽⁵⁾ を発表している。これには英雄叙事詩・散文説話・神謡といったジャンルのテキストが含まれているが、特に英雄叙事詩は原文対訳で発表された最も古い時期のものである⁽⁶⁾。そして、1901年には、*The Ainu and their Folk-lore* (Batchelor 1901 以下、Folk-lore) を刊行している。これはバッチェラーが公刊した最も大きなアイヌ民俗の研究書であり、アイヌ口承文芸も数多く収められている。そして1924年には *Uwepekere, or, Ainu Fireside Stories* (Batchelor 1924 以下、Fireside Stories) を発表しているが、これは50のアイヌの伝承をアイヌ語・英語対訳で紹介したものである。1927年には Folk-lore に代わるアイヌの伝承をまとめたものとして、*Ainu Life and Lore* (Batchelor 1927 以下、Life and Lore) を刊行するが、それや Fireside Stories には、Materials と非常に似た物語が収録されている。バッチェラーも対雁にいた樺太アイヌ⁽⁷⁾ のデンベ(畠山伝兵衛)からアイヌ語を習っていることが知られているので⁽⁸⁾、その時に採録したものであるとも考えられる。しかし、後述するように、それらは Materials からの転載である。そこで、以下ではアイヌの伝承に関する主要な著作である Folk-lore, Fireside Stories, Life and Lore を取り上げ、掲載されている樺太アイヌの口承文芸について Materials との対応関係、バッチェラーによって追加、変更された点を見ていく。

1.1. *The Ainu and their Folk-lore* (Batchelor 1901)

バッチェラーの代表作の一つである Folk-lore には樺太の伝承がほとんど記録されていない。その日本語版の『アイヌ人及其説話』(バチエラ 1900) 序文には、以下のように記されている⁽⁹⁾。

「本書に論ずる説話は唯蝦夷アイヌのことにのみ属すれども著者は樺太島アイヌと親しく接せしは僅かに四ヶ月に過ぎず故に該島の住民の説話は実正或は真確なりと自ら之を保証する能はず故に本書には樺太アイヌの事は稀に記載するのみなり」(バチエラ 1900: 2-3)

実際、Folk-lore は原著で 604 頁もある大著ながら、樺太の伝承はほとんど見られない。それに対し、さらに後の Fireside Stories (1924 年)、Life and Lore (1927 年) には樺太アイヌの口承文芸が豊富に含まれている。前著の方が民俗資料としての性格が強いかかわらずである。バッチェラーが樺太アイヌと接していたのは 1878 年の「四ヶ月」だとあるので、後になるほど樺太(対雁)の伝承が増えることは、バッチェラー自身が採録したのではない可能性を高めている。

1.2. *Uwepekere, or, Ainu Fireside Stories* (Batchelor 1924)

Fireside Stories は 1924 年に出版され、その翌年には日本語版が公刊されている。日本語訳は英語訳の翻訳であり、アイヌ語から日本語に翻訳したものではない。この中には 50 のアイヌの伝承がアイヌ語・英語対訳で紹介されている。これらのアイヌ語による伝承は、バッチェラーの信徒によって筆録されたものであることが序文に記されているが、その序文からはかなり古い、アイヌ人によるアイヌ語の記録であることが伺える⁽¹⁰⁾。

以下の物語は、およそ 40 年前に私自身がローマ字で書くことを教えたあるアイヌが、私のために書き記したものである。(Batchelor 1924 序文より拙訳)

収録されている物語の中には、地域の分かる物語もあるが、ほとんどの物語において、筆録者は不明である。アイヌ語の表記をはじめ、バッチェラーが手を入れたと思われる箇所もある。英訳は、アイヌ語に一語一語対応するという訳というよりは、全体を意識したものとと言える。さらにアイヌ語原文は、いくつかの方言が混ざっているように見えるところがある。例えば、「～と（言う）」というように引用を表す語彙には方言差が見られるが (sekor (沙流、石狩周辺) と ari (それ以外の地域))、一つの物語に混在することもある (例えば第 8, 9 話)。これは筆録者が複数の地域で暮らしていたことを示す可能性もあるが、バッチェラー自身が書き換えた、もしくは複数の物語を一つにまとめたからとも考えられる⁽¹¹⁾。

Fireside Stories の中には樺太アイヌの口承文芸も含まれており、一つを除いてバッチェラー自身が対雁に暮らしていた樺太アイヌから聞いたことになっているが、実際にはピウスツキの *Materials* から転載された物語である⁽¹²⁾。

1.3. *Ainu Life and Lore* (Batchelor 1927)

Life and Lore は、もともと東京で発行されていた新聞にバッチェラーが連載していたものを一冊の書物にしたものである⁽¹³⁾。1901 年出版の *Folk-lore* に樺太に関する記述がほとんど見られないのに対し、後年に出版された *Life and Lore* には樺太の口承文芸が豊富に含まれている。1927 年出版の *Life and Lore* において、急激に樺太の口承文芸が増加するのは、やはり 1912 年に出版された *Materials* から転載されたからだと考えるのが自然である⁽¹⁴⁾。

2. バッチェラーの著作中の樺太アイヌの口承文芸

以下では、バッチェラー著作に見られる樺太アイヌの口承文芸の情報源を具体的に明らかにする。バッチェラーの主要著書に関して、出版年の古い順にどのようなタイプの情報が掲

載されているかを見る。また、必要に応じて、バッチェラーの自伝に掲載されている情報にも触れる。

2.1. *The Ainu and their Folk-lore* (Batchelor 1901)

この著作には、1892年の前作 *The Ainu of Japan* (Batchelor 1892) と同様、樺太の伝承がほとんど見られない。樺太に関するものとして、引用を除けば、6ヵ所しか確認できない。そして、そのほとんどが道具に関する記述で、口承文芸は掲載されていない。Folk-lore 原著 114 頁 (バチラー 1995: 113, 115) には、樺太アイヌのイナウ (御幣) が図入りで紹介されているほか、150 頁 (バチラー 1995: 148) には、函館の博物館の収蔵物である樺太アイヌの雪靴について記述されている。また、154 頁 (バチラー 1995: 150) には、バッチェラー自身の見聞かは不明だが、樺太アイヌの女性が大きな輪と中国の硬貨で飾られた帯をしていることが書かれている。これは *Life and Lore* 38 頁 (バッチェラー 1999: 36) の記述と照らし合わせると、ペンリ⁽¹⁵⁾ が所持する帯を見て記述したものだと思われる。273 頁 (バチラー 1995: 238) では、樺太アイヌが一種のバイオリン (fiddle、トンコリ「五弦琴」のこと) を作り、1~4 本、あるいはそれ以上の弦をつけること、それらが札幌の博物館、石狩アイヌ⁽¹⁶⁾ の間で見られることを記している。これはバッチェラーが対雁の樺太アイヌから得た情報の可能性がある。また、562 頁 (バチラー 1995: 460) には、樺太アイヌの墓に関する記述が見られるが、*Life and Lore* 160 頁 (バチラー 1995: 134-135) と照らし合わせると、これもサハリンに渡った経験のあるペンリウク (平村ペンリ) からの情報に基づくと思われる。また、樺太アイヌの墓標に関して、Folk-lore の日本語版の 1 つであるバチエラー (1925: 433) には、その図が掲載されている (原著にはない)。ただし、これは現地で墓標を見て描写した図なのかは定かではない。

以上のように、Folk-lore における樺太アイヌの記述では、物質文化に関する記述が若干見られるものの、その情報は、バッチェラー自身が樺太アイヌから得たものではないようである。

2.2. *Uwepekere, or, Ainu Fireside Stories* (Batchelor 1924)

Fireside Stories において、Materials から転載されたと思われる物語が 6 話見られる。以下、その 6 話がどのように紹介されているかを確認していく。*Fireside Stories* の 6 話と Materials () 内は知里 1973 [1944] での Materials 日本語訳の掲載番号) の対応関係を示すと以下ようになる (日本語タイトルはバチラー 1928 による)。

表 1. Fireside Stories と Materials の対応関係

番号	タイトル (上から英語・アイヌ語・日本語)	語り手などの情報	Materials 番号 語り手 (採録地)
①	36. The old man of psychic impulses Chikoramo Chacha. 老人の精神活動	樺太から対雁にきたアイヌ男性	Nr. 11 (36) ラマンテ (トゥナイチ)
②	38. The metal with luminary forms Chup-noka-un-kani. 日月形のある金	数年前、あるアイヌの集落で集会を開いたとき、若いアイヌ女性がアイヌ語と日本語を交えて語ったもので、樺太から伝わった物語	Nr. 8 (34) シシラトカ (タライカ)
③	40. The demon of the torch Pentachi Koro Orushpe. 火把を持つ化物	樺太由来の物語だが、北海道でもよく知られている物語である。ここでは樺太バージョンを掲載する	Nr. 5 (38, 37) ②に同じ
④	42. The six-tailed demon Iwai Sar'ush Kamui. 六尾の魔物	設定と言語に関して、最も古いものと思われるので、Materials 27 話を挙げるが、それは私が何年か前に採録したものと大差ない	Nr. 27 (19) ニタ (アイ)
⑤	44. The empty-house-demon Ohachisuyep. 空家の化物	対雁に居住していた樺太アイヌ	Nr. 9 (39) イポホニ (フヌフ)
⑥	45. The dog-collar charm An-koshinnuka hana. 犬の頸環の護符	樺太アイヌから伝わった物語の一つ	Nr. 7 (35) ②に同じ

④を除いて、Materials からの転載であることに触れられていない。多くの場合、バチェラーが対雁に暮らしていた樺太アイヌから採録したことになっているが、本文自体は、バチェラーの解釈で表記、語形が変わっていることを除けば、Materials そのままである。また、もとの話の語り手もそのほとんどが対雁に居住した経験がなく、Materials 第 27 話（つまり Fireside Stories 第 42 話）の語り手のみが対雁居住経験を持つ。以下で、以上の 6 話を見ていくが、バチェラーは採録状況や解釈・後日談を書いており、それらの物語をあたかも自分自身が採録したかのように記述している。

① 第 36 話 「精神衝動の老人」

物語本文の前には以下のような紹介文が付けられている。この物語は Life and Lore (Batchelor 1927: 100; バチェラー 1999: 87-88) にも掲載されている。あらすじは以下のとおりである。

ある男が、どういう訳か冬山に行って、小屋を作って泊まった。夜、眠っていると、自分と呼ぶ声がある。ふと気が付くとアザラシの毛皮で作った服を着た女性がいる。先ほどの声に誘われて外に出ようとする、その女性がキセルで脛を叩いたので目が覚めた。見ると、女性はいなかった。翌朝外に出ると、テンに呼ばれたのだと分かった。

この物語に対する、バッチェラーの紹介文は以下のとおりである。

以下の物語では、ときおり精神の衝動によって動かされた男のことが語られている。彼は内部の衝動によってあちこちへ運ばれた。この衝動が現れる時には、理由は分からないが服従せざるを得なかった。彼はその精神によって動かされ、その命令を実行しなければならなかった。これは1874年にサハリンから札幌近くの対雁に住むために来たある男性によって語られた。その男性はのちに北の故郷に戻り、そこで間もなく亡くなった。これは北海道でよく知られているが、私はここで、より言語が興味深い北方の表現で掲載する。(Batchelor 1924 : 68、拙訳)

この物語のタイトルにも含まれているチコラモに関しては以下のように述べている。

私が「精神の衝動」と訳したチコラモ *Chikoramo* は、極めて興味深いもので、受動的な意味を持つ。完全な形では「チ・コ・ラム・オ *chi-ko-ramu-o*」と言い、「自分自身の靈魂によって運ばれる」ことを意味し、心の潜在意識の状態を指す。(Batchelor 1924 : 68、拙訳)

対雁の樺太アイヌから聞いたとあるが、実際にはこの物語は *Materials* 第11話からの転載である。語り手はトゥナイチ（富内）に住んでいたラマンテ⁽¹⁷⁾ であるが、対雁には居住していない。また、チコラモ *Chikoramo* は、『辞典』第3版の補遺 (Batchelor 1932 : 12) に初めて登場する語彙であり、そのことからバッチェラーが対雁の樺太アイヌから得た情報というよりは、*Materials* から得た情報であると考えるのが妥当である。ただ、その解釈にはバッチェラー自身の経験が組み込まれているようである。Life and Lore に、同じ伝承が掲載されていることは冒頭ですでに述べたが、その話の直前には、*Fireside Stories* の本話の紹介文と同じような逸話⁽¹⁸⁾ がより詳細に記載されている。それによれば、この「精神衝動」を起こしていたのは、有珠生まれのパラピタというバッチェラーの使用人であり、パラピタは時々「山への叫び声」を聞き、それに従わざるを得なかったという。また、この物語の最後にはバッチェラーがこう書き加えている。

男性を外におびき出し殺そうとしたのはテンの靈魂である。テンはこの世界にたくさん生息している。アイヌ人はその非常に貴重な毛皮を得るためにテンを捕獲するが、この男性はあまり信仰の心を持っていなかったため、狩りで仕留めたこうした獣の靈魂に捧げもの（註—イナウ「木幣」）を送らなかった。このことにテンは大いに腹を立て、そのうちの一匹が復讐しに来たのである。

アイヌの考え方では、生き物を殺すことはその生命を消滅させることを意味しない。どんな生命でも消滅することはありえない。別の同様の肉体をまとめて現れるかもしれないものを遠くへただ送っているだけである。そして、生き物を殺した時には、必ず適切な敬意を持って扱われなければならない。(Batchelor 1924 : 70、拙訳)

この解釈は、Materials にはない部分で、語り手によるものではなく、バチェラー自身の解釈である。これはバチェラーの自叙伝である“Steps by the Way”の「注目すべき夢」(Batchelor 2000 : 103 ; 仁多見・飯田 (編訳) 1993 : 242) においても、引き継がれている。これもまた、Fireside Stories と同じく、たくさんのテン⁽¹⁹⁾を獲ってきたが、祀らなかったため、テンの一族から復讐を受けそうになるという説明になっている。しかし、この話全体が夢という設定になっている点で更に変化している。

② 第 38 話 「日月形のある金」

この物語は Materials の第 8 話からの転載である (そもそも「アイヌ語と日本語を交えて語った」と述べているにもかかわらず本文は全てアイヌ語である)。この物語はタライカ (多来加) のシシラトカ⁽²⁰⁾で、対雁には居住したことがない。

この物語に関して、バチェラーが意識的に書き換えていると思われるのは、チャクチャンケ (Materials ではチャハチャンキ) という語彙の訳語である。ピウスツキが a girl's loin-cloth 「少女の腰帯、下帯」と訳しているものをバチェラーは an apron 「前掛け、前垂れ」としている。この語に付けられた註においても、ピウスツキの Materials をもとに執筆していることが明らかだが、猥雑だとの認識のもとに an apron に書き換えられたのではないかと推測される⁽²¹⁾。なお、『辞典』では、第 3 版においてはじめてチャクチャンキ (64 頁) という語彙が出現する。

さらにこの物語の後に、登場人物のシトレク (Materials ではシトリカイヌ (シトリク・アイヌ)) を知るアイヌのことに触れている (日本語訳のバチェラ 1925 では割愛されている)。彼は物語で語られている有名な金属を見るために、はるばるサハリンを訪れたが、その金属はすでに真っ黒になりすでに輝きを失っていたが日本の鏡のようだった、と語ったとある。この後日談はバチェラーの創作の可能性もあるが、同じ逸話がずっと後の藤村 (1993 : 22-23) にも記されており、樺太アイヌの間でよく知られていたものなのかもしれない⁽²²⁾。

③ 第 40 話 「火把を持つ化物」

この物語の語り手も Fireside Stories 第 38 話と同じく、シシラトカであり、対雁に居住したことの無い語り手である。なお、バチェラーが、北海道でもよく知られている物語で

ある、としている理由はよく分からない。“Steps by the Way” (Batchelor 2000 : 48 ; 仁多見・飯田編訳 1993 : 93-94) においても、同じ話が掲載されているが、そこでは一つ前の章において (アイヌではなく) 日本の *kitsune-bi* 「狐火」について説明しているので、そのことを指しているものかもしれない。その狐火の説明の後で、「数年後のある日、友人が、アイヌにとっての狐火の話をしてくれました」(仁多見・飯田編訳 1993 : 93 ; Batchelor 2000 : 48) となって物語が始まる。物語では「松明を持つ化け物」がペンタチ・コロ・オヤジ⁽²³⁾ という樺太方言で表現されているため、樺太のものであることが分かるが、あたかも自分が聞き取ったかのように記述されている。

なお、アイヌ語に関して、エチャウレ (Materials ではアチャウレ「ワタリガラス」) という誤植があるが、『辞典』第3版には正しくアチャウレで登録されている。

④ 第42話「六尾の魔物」

この物語のみ、Materials から引用されたことが記載されている。この物語は Life and Lore (Batchelor 1927 : 364-365 ; バチェラー 199 : 298-300) にも掲載されている (ただし、こちらには引用情報はない)。そして、物語の前置きとして、バチェラーは「六尾の魔物」を瘡瘡神だと述べているが (これは Life and Lore でも同様)、Materials ではその正体について語られていない。北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会 (訳) (1991 : 145) によれば、この六尾の魔物はオオカミであるという。

更に、次のようにバチェラーは付け加えているが、その部分はバチェラー自身が別の機会に得た情報であると思われる。

2行目では、夜に犬が吠える事を語っている。明確な理由が何もない夜に犬が吠えるのは、悪いものがうろろうしていて、それを警告しているのだとアイヌ人は考えている。それはおそらく死か火災である。犬は特に幽霊か悪魔に吠えるという。人々はまた鳥が他の場所へ知らせを運ぶと信じている。(Batchelor 1927 : 83、拙訳)

バチェラーはこの物語の語彙のうち、イシカタンデに註を付けているのだが、Materials ではイシタカンテである。これはおそらく、バチェラー自身の “transformed himself into the shape of” という解釈に合わせる形で カッ kat 「姿」を含む語形にしたと考えられる。このイシカタンデ、イシタカ^{ンテ}という語彙の両方とも、『辞典』の第3版から見られる。イシカタンデの解釈は Fireside Stories と同じであるが、もう一つのイシカタンデは以下に挙げるように、解釈が異なっている。イシタカ^{ンテ}自体は Materials 第22話にも出現し、それは「夢で告げられた」「夢を見せられた」という場面で用いられているので、そこから収集したものだと思う。なお、イシカタンテは (イ・) シタカ^{ンテ} 「(私) に夢

を見せる、(私)の夢に現れる」が解釈として相応しいと思われる(i-は一人称目的格「私に、私を」を表す人称接辞)。

Ishikatande, イシカタンデ, 形式ヲ変ヘル. v.i. To change one's form. (第3版 195頁)

Ishitakande, イシタカンデ, 夢ヲ見テ居ル. v.i. To be in a dream. (第3版 196頁)

⑤ 第44話「空家の化物」

この物語も対雁の樺太アイヌから聞いたことになっているが、語り手は対雁に居住したことはない。内容に関しては、ほぼMaterialsのままであり、特筆すべき箇所はない。

アイヌ語に関しては、物語中にアイヌ・チンという語彙が出てくるが、これはMaterialsではアイヌヘチンである。『辞典』の文法解説(第3版40頁、第4版36頁)においても、アイヌ・チン「アイヌたち」という間違っただけの語形で、その他多くの実在しない語形と共に掲載されている。

⑥ 第45話「犬の頸環の護符」

この語り手もFireside Stories第38話と同じく、シシラトカであり、対雁に居住したことのない語り手である。物語の前の紹介文には、パチェラー自身の体験談が含まれているようである。

アイヌ人はたくさんの物を呪物や護符として用いる。樺太アイヌの物語の一つである次の物語は、非常に好奇心を掻き立てるものである。この島(註一サハリン)はご存じの通り、冬は寒さが厳しく、そこでは犬橇が用いられている。その橇犬は非常に役に立つものだが、獐猛な性質で、私自身も一度先頭犬に襲われたことがあるが、幸運なことに事なきを得た。(Batchelor 1927: 92-93)

小括

以上、Fireside Storiesに掲載されている樺太アイヌの口承文芸はMaterialsの転載であることを見た。特に話者に関しては、パチェラーが対雁の樺太アイヌと書き換えており、自ら採録したものであるような印象付けがなされている。パチェラーも同じ伝承を聞いていた可能性がないわけではないが、テキスト自体は、表記が若干変更されているもののMaterialsの転載である。アイヌ語テキストに関して、表記はMaterialsを改悪したものでしかなく、アイヌ語の資料としては役に立たない。ただ、一部には、パチェラー自身の解釈や体験談が盛り込まれていることがある。また、詳しくは扱わなかったが、Fireside Storiesに出現する語彙を含めた樺太方言は『辞典』第3版以降に初めて登場することが多

く、年代的にも Materials からの引用であると考えられる。

2.3. *Ainu Life and Lore* (Batchelor 1927) 中の樺太アイヌの口承文芸

Life and Lore のうち、樺太のものと思われる物語は 17 話存在する。これらは、全て Materials からの転載（文章自体はバッチェラーによるので再話と言うべきかもしれない）である。以下に一覧にして示す。タイトルは日本語訳であるバッチェラー（1999）のものである。*Life and Lore* (Batchelor 1927) での掲載ページの後に（）で日本語訳（バッチェラー 1999）での掲載ページを示した。Materials の物語番号の列で（）で括った部分は Materials の日本語訳が掲載されている知里（1973 [1944]）の番号である。

表 2. *Life and Lore* と Materials の対応関係

番号	章	タイトル（無い場合は、（）で章タイトルを記した）	掲載ページ	語り手に関して (⑧、⑭、⑱のみ)	Materials 物語番号 語り手（採録地）
⑦	5	「アイヌとオロッコ（ウイルタ）との戦い」	29 (28)		Nr.4 (31) ②に同じ
⑧	14	(山からの叫び声)	100 (87)	北の地方のアイヌから聞いた。	Nr.11 (36) ①と同一話
⑨	16	(アイヌはどのようにしてこの世に創り出されたか)	125 (107)		Nr. 3 (32) ②に同じ
⑩	18	「熊に変身した女」	133 (114)		Nr.12 (14) ②に同じ
⑪	25	(結婚)	201 (167)		Nr.14 (29) ⑤に同じ
⑫	27	(我が友、テエ氏とアリマクナ氏)	224 (185)		Nr. 1 (5) ヌマル（トゥナイチ）
⑬	32	(巫術と巫術師の交霊の仕方について)	280 (231)		Nr.10 (40) ⑤に同じ
⑭	33	「愛と復讐の物語」	287 (238)	数年前、対雁の樺太アイヌから聞いた。	Nr. 2 (33) ②に同じ
⑮	35	「祖父と、孫息子と、悪心と、半神半人の物語」	305 (252)		Nr.16 (16) ⑫に同じ
⑯	38	「神と人間との術くらべ」	320 (264)		Nr.17 (21) チベーカ（トゥナイチ）
⑰	41	「怪物の悪神から二人の兄を救った少年」	337 (278)		Nr.23 (18) ヤシノスケ（トゥナイチ）
⑱	44	「愛しい十二人の若者を失い、人の姿をした熊と結婚した女」	357 (292)	対雁の樺太アイヌの一人から聞いた。	Nr.26 (22) ④に同じ
⑲	45	(木で作った『イナウ』と、病気の悪神を斃す物語)	364 (298)		Nr.27 (19) ④と同一話
⑳	48	「神々の罰を受けた、残酷で意地悪な男の物語」	381 (310)		Nr.25 (8) ⑤に同じ
㉑	51	「魚が獲れなくなったために飢饉になった伝説」	403 (327)		Nr.22 (20) ⑰に同じ
㉒	54	「ある小狐の語った話」	428 (345)		Nr.21 (8) ⑰に同じ
㉓	55	「ある狐が話した物語」	433 (350)		Nr.15 (10) ⑤に同じ

これらの物語は Fireside Stories と異なり、アイヌ語「原文」はなく、より一般向けに書かれているものである。いくつかは Fireside Stories と共通する (①と⑧、④と⑱)。ここでは一つ一つの物語について述べることはしないが、バッチェラーによって意図的に変更されたと思われる個所を中心に取り上げる。

Fireside Stories と異なり、採録状況が書かれているものは少なく (⑧、⑭、⑱、⑳のみ)、口承文芸を掲載するだけのものが多い。多くは、樺太アイヌの口承文芸であることすら記載されていない。樺太アイヌのものであることが記載されている⑧、⑭、⑱においても、対雁の樺太アイヌが語ったものとなっている。内容は基本的に Materials の内容と一致するため、Life and Lore に関しても、バッチェラーが Materials の記述に頼っていることは明らかである。

⑧では、「このことは、ずっと、北の地方に住むアイヌから聞かされたものである。この話は、私が以前書いた『アイヌの炉辺物語』の第三十六話の中で次のように述べておいた」(バッチェラー 1999 : 87 ; Batchelor 1927 : 100) とあり、Fireside Stories 第 36 話 (①) が初出のように書かれているが、Materials 第 11 話の転載である。

⑫では、「私がこの地 (註一北海道か) の人びとから伝承を聞いて集めていた頃、その話し手が自分の思い通りに話し始めると、余計な質問などはせずに、それが次々と進むままにして聞くように心がけていたので、別の方法では得られないほど多くの伝承を聴取することができた。従って、私はその沢山の伝承を聞いては、それをやっとの思いで記しとめていた。次に上げる大そう興味深い伝説もその中の一つである。私はこの伝説を、『魚が獲れなくなったために飢饉になった伝説』と呼ぶことにしている」(バッチェラー 1999 : 327 ; Batchelor 1927 : 403) とあり、採録時の様子が具体的に書かれているが、やはり内容は Materials の転載である。

⑪では Materials 第 14 話が掲載されているが、「どうして女性の方から先に男性に結婚の申し込みをするようになったかが説明されている」(バッチェラー 1999 : 167 ; Batchelor 1927 : 201) とある。しかし、元の Materials では、キーレンの女はどんな貧しい男に対しても肌身を許したがる (Materials : 141 ; 知里 1973 [1944] : 319 も参照) となっている部分である。これはバッチェラーの倫理観によって「結婚」に置き換えられたのではないと思われる。

⑬が掲載されている章では、バッチェラー自身が巫術師に悩まされたことが書かれているが、この章に引用されている Materials 第 10 話 (ただし、出だし部分は同じく空き家の化け物の話である第 9 話 (⑤) からとられているようである) の解釈においても、巫術師に対する評価は厳しい。空き家の化物が倒された場面においても、「巫術師自身が人々を騙すために (空き家の化け物が流した血の) 赤いマークを付けたのだと私は確信している」(Batchelor 1927 : 284、拙訳) としている。そして、巫術師も自分が運命を共にしようという人々であると締めくくっている (Batchelor 1927 : 285 ; バッチェラー 1999 : 236)。

⑬は④と同じ物語だが、ここでもやはり、六尾の化物が病気の神として扱われている (Batchelor 1927 : 364 ; パチェラー 1999 : 298)。また、⑭ではキツネが首長の妻の魂を取るために、夫婦のクマに助力を頼むが、そのクマのオスはセクマ・パウシ・カムイ (Materials : 187) である。『辞典』第3版補遺以降にこれと似た語彙のセクマ・パウセ・カムイ⁽²⁴⁾が収録されるが、解説を見ると、Materials 192-193 頁のピウスツキによる註をもとにしたことが分かる。しかし、Life and Lore でははっきりとそれがクマだと語られているのに対し、『辞典』では化けギツネまたはオオカミ (『辞典』第4版 : 441) とある。時期からして、Life and Lore 刊行後に、解釈を変更したのではないかと思われる。

更に Life and Lore では、一部の固有名詞が変更されている。⑮では Materials 第3話が掲載され、Flower-of-the-plain 「野の花姫」 (Batchelor 1927 : 125 ; パチェラー 1999 : 107) という名前の人物が登場するが、Materials 59 頁ではサウンノンス (サ「浜手」ウン「にある」ノンス (～ノ)「花」) である。パチェラーによって名前がアイヌ語から英語に翻訳されている (日本語訳ではさらに「姫」が付け足されている)。これは読者に親しみを持たせる目的なのかもしれない。

また、⑯では、登場人物の名前がラ・ベル La Belle (Batchelor 1927 : 287) に変更されている。もともとはイナヌピリカという名前である (Materials : 45)。このラ・ベルというのは、おそらくラ・ベル・オテロ La Belle Otero の名で活躍したカロリーナ・オテロ Carolina Otero (1868-1965) からとられたものである。オテロは、スペイン生まれのダンサー・俳優で、数多くの権力者と交際した。パチェラーはイナヌピリカにオテロを重ね合わせ、ラ・ベルと名付けたのだと思われる。これにはラ・ベルに対する揶揄も込められているのかもしれない。

また日本語訳に際して、誤解が生じている箇所がある。⑰には Materials 第3話が掲載されているが、その前置きとして「未だ二、三年も経っていないと思うが、サハリン (樺太) の「忍耐の入り江」(註一原文は Bay of Patience) にある「駒鳥の島 (註一原文は Robin Island)」はアザラシ (海豹) を獲るためにはもって来いの場所であった」(パチェラー 1999 : 107 ; Batchelor 1927 : 124) とある。Bay of Patience (Materials 62 頁では Patience Bay⁽²⁵⁾) とはタライカ湾 (テルペニヤ湾) のことである。また、Robin は Materials 62 頁で Robbin とあるもので、「駒鳥」ではない。もとはオランダ語で「アザラシ」を意味する語彙である (山田 2010 : 54)。つまり、Robbin-Island が示しているのは海豹島 (チュレニー島) である⁽²⁶⁾。

さらに、⑱に関連して Life and Lore には以下のように述べられているが、日本語訳のパチェラー (1999) ではその箇所が抜けている。

ヤチダモはアイヌの伝承中にしばしば語られ、私もそうした物語をうわさに聞いてい

る⁽²⁷⁾。その物語にヤチダモが登場することから、ヤナギがアイヌの間で普遍的なトーテムであるように、ひょっとすると一種の部族のトーテムなのかもしれないと考えられるようになった。サハリンの東海岸に位置するトゥンナイ・チャの住民は、ヤチダモに特別な愛着を持っており、その助力によって、自らの部族がはじまったのだと説明する (Batchelor 1927 : 355、拙訳)

なお、ここでトゥンナイ・チャ (ママ) の住民と限定されているのは、この Materials 第1話 (⑫) の採録地がトゥナイチ (富内) だからに他ならない。

まとめ

パチェラーの著作はアイヌ文化研究において、貴重な資料であることは間違いないが、その利用には注意を要する。著作には、パチェラー自身が聞き取ったものではなく、他人の著作から転載したものがあつた。しかも、それはほとんどの場合、転載したと分かる形で掲載されていないため、資料として非常に利用しにくくなつてゐる。特に樺太アイヌの口承文芸は、そのほとんどが Materials から転載されたものだと考えられる。パチェラーの『辞典』に関しても、樺太方言の語彙は第3版から急激に増えるが、それらの語彙の多くは Materials からとられたものである (これに関しては稿を改めて検討したい)。

本稿では、パチェラーの著作に見られる樺太アイヌの口承文芸を対象に転載の実態を提示した。そして、Materials が転載されるに当たつて変更された箇所に関して検討したが、パチェラーが意図的に変更したと思われる箇所が見られた。特に語り手の情報は、対雁の樺太アイヌに変更されていることが多く、自らが採録したかのように掲載している。内容に関しては、おおむね Materials 通りであるが、他から得た情報や、自分自身の経験を挿入している箇所もある。また、猥雑と判断した箇所を変更している可能性がある。

パチェラーの著作は、樺太以外に関しても、ほかの資料と照らし合わせる必要があると思われる。こうした基礎的な手続きを踏むことで、パチェラーの著作のどこがオリジナルでどこが転載なのか、どのような世界観が反映されているのかを明らかにすることにつながる。これは結果としてパチェラーの著作の資料価値を高めることにもなる。パチェラーの記録を生かすためにも、今後、更なる文献学的研究を進める必要があるだろう。

註

- (1) 名前の日本語表記には著書により差異が見られるが、以下ではパチェラーで統一する。
- (2) パチェラーとも交流していたチェンバレンの記録には、語り手も採録日も記載されていることを考えればなおさらのことである (Chamberlain 1887 : 1888)。
- (3) 以下、『辞典』に言及する際は、第何版かを明記する。パチェラ (1889) が第1版、パチェラー (1905) を第2版、パチラー (1926) を第3版、Batchelor (1932) を第3版補遺、

バチラー (1981 [1938]) を第4版と表示する。

- (4) バチラー (1981 [1938] : 106-107) に掲載されているものと3、3の語彙の違いを除き(エビッタ、エビッタとあるものがこの書ではオビッタとなっているなど)、本文が一致する。語彙の相違は後年バチェラーが書き換えたのかもしれない。
- (5) ここに掲載されている伝承の多くはバチラー (1926 : 120-138)、バチラー (1981 [1938] : 105-145) に再掲されている。
- (6) バチェラーが発表する少し前に永田方正が「蝦夷人の長歌」として「ポイヤウンベ」と題された英雄叙事詩を発表している(永田(訳)・青萍(識) 1887)。
- (7) 1875年の樺太・千島交換条約によって日本へ移住することになった樺太アイヌ。当初の希望通り、いったん宗谷へ移住したが、後に対雁へ強制移住させられる。対雁アイヌや石狩アイヌとも呼ばれる。劣悪な環境に置かれたこともあり、伝染病などで人口の約半数を失った。日露戦争によってふたたびサハリンが日本領となる頃までに、ほぼ全員がサハリンへ帰還した。
- (8) バチラー (1928 : 127-128) や早川 (1970 : 211-212) 参照。
- (9) 日本語訳にはバチエラ (1900)、バチエラー (1925)、バチラー (1995) の3種類あるが、バチエラー (1925)、バチラー (1995) にはこの箇所はない。ただし、バチラー (1995) では安田一郎氏による「訳者あとがき」においてこの部分の存在が触れられている。
- (10) 公刊されたものとしてはウレンキシマ (著)・神谷 (識) (1893) が最も古いものではないかと思われる。
- (11) Fireside Stories 第2話は、Batchelor (2000 : 84-85) において、ペンリウク (註15参照) が、いくつかの機会に語ったものとなっている。
- (12) 金田一 (1961 [1926] : 455) は Fireside Stories を「初学にも最も恰好の教科書用書」と紹介するだけで転載などには触れていない。また、知里 (1936) も Fireside Stories を参照しているが、自身が掲載する物語の類話に触れるだけである。後に Fireside Stories は河野 (選) (1980) や Refsing (1996) で複製されているが、その解題においても Materials との関わりについては触れられていない。それに対して藤村久和氏は、Fireside Stories に記されていることもあってか、Materials 第27話に関しては転載の事実気が付いており、北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会 (訳) (1991 : 144) において Fireside Stories を参照している。
- (13) Batchelor (1927 : 序章) より。バチェラー (1999 : 7) には『ジャパン アドバイザー』とあるが、正しくは Japan Advertiser である。
- (14) バチェラー (1999) の解題においても、物語の1つがバチェラーによって創作されたものであるという指摘はなされているものの、Materials との関係に関しては触れられていない。
- (15) その当時平取の有力者であったペンリウク (平村ペンリ) のこと。ペンリウクはバチェラーと親交を深め、アイヌ語やアイヌの作法を教えた。
- (16) 註(7) 参照。
- (17) 日本名は東内忠蔵。金田一 (1923 [1914]) の語り手として知られている。
- (18) Folk-lore (Batchelor 1901 : 169 ; バチラー 1995 : 161) にも同じ逸話が見られる。
- (19) 日本語訳では「マツテン」とあるが、原典である Materials をもとにテン (アイヌ語で

ホイヌ)とした。

- (20) 日本名は花守新吉とも。白瀬轟の南極探検隊に加わった樺太アイヌの一人としても知られている。
- (21) このタイプの書き換えは、バチラー (1981 [1938]: 108) のパンンベ譚にもみられる。その話は Chamberlain (1888: 35-36) にも掲載されているものであり、「原文は 1886 年 6 月、ジョン・バチラー氏による通信、Aino Memoir (註—Chamberlain 1887 のこと) 133 頁にも印刷されているが、猥雑な表現は抑えられている」とある。実際、penis が tail (アイヌ語も「サラ」に変更「しっぽ」) に置き換えられている。
- (22) 藤村氏はこの話を北海道に引き揚げてきた樺太アイヌの女性から聞き取っている。藤村氏が聞き取ったという Materials 第 8 話 (つまり Fireside Stories 第 38 話) の類話では、「女性の陰部覆い」がシカハカハ (これは日除け、日覆い) だとされているが、2.2 の④でも触れたとおり正しくはチャハチャンキである。本稿には直接かかわらないが、藤村 (1993) には他にも情報が混乱している箇所がある。Materials の「二十七話のなかにアイヌの祖先がこの世に下りてくる神話があります」(16 頁) とあり、あらずじが掲載されているが、その物語は Materials のものではない (北海道の物語だと思われる)。
- (23) ベンタチ・コロ・オヤシの誤植と思われる。
- (24) バチラーの掲載する語形がパウセとなっているのも、キツネだという解釈が念頭にあり、キツネの鳴き声として知られるパウセという語形に変更されたのだと考えられる。
- (25) 一般には Gulf of Patience と言うようである。
- (26) 日本でもかつて海豹島はロッペン島と呼ばれていたことから、Robbin-Island が海豹島であることが推測される。
- (27) この部分は英語で There is one tradition I know of となっており、間接的な知識であることを正直に言っているようである。

参考文献

- ウレンキシマ (訳)・神谷恕 (識) 「船木ノ神トオキクルミノ話」『東京人類學會雑誌』9 (92): 82-83、1893 東京人類學會
- 金田一京助『北蝦夷古謡遺篇』1923 (1914) 郷土研究社
- 金田一京助「アイヌ語学研究資料について」『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』449-456、1961 (1926) 三省堂
- 河野本道 (選) 『アイヌ史資料集 第 5 巻 言語・風俗編 (二)』1980 北海道出版企画センター
- 知里真志保『アチックミュージアム彙報第八 アイヌ民俗研究資料 第一』1936 アチックミュージアム
- 知里真志保「樺太アイヌの説話 (一)」『知里真志保著作集』2: 251-372、1973 (1944) 平凡社
- 永田方正 (訳)・青津逸人 (識) 「蝦夷人の長歌」『東洋学芸雑誌』68: 371-381、1887 東洋学芸社
- 仁多見巖・飯田洋右 (編訳) 『わが人生の軌跡—ステップス・バイ・ザ・ウェイ』1993 北海道出版企画センター
- バチロル『蝦夷今昔物語』1884 発行所不明

- バチエラ, ジョン 『蝦和英三対辞書』 1889 北海道庁
- バチエラ, ジェー 『アイヌ人及其説話 上編』 1900 教文館
- バチラー, ジョン 『アイヌ。英。和辞典及アイヌ語文典』 (第2版) 1905 教文館
- バチエラー, ジョン 『アイヌ人とその説話』 1925 富貴堂書房
- バチエラ, ジョン 『アイヌの炉辺物語』 (河合裸石 (意譯)) 1925 富貴堂書店
- バチラー, ジョン 『アイヌ。英。和辞典』 (第3版) 1926 教文館
- バチラー, ジョン 『我が記憶をたどりて』 1928 文録社
- バチラー, ジョン 『アイヌ・英・和辞典 第四版』 1938 岩波書店
- バチラー, ジョン 『アイヌ・英・和辞典』 (第4版) 1981 (1938) 岩波書店
- バチラー, ジョン 『アイヌの伝承と民俗』 (安田一郎 (訳)) 1995 青土社
- バチエラー, ジョン 『アイヌの暮らしと伝承—よみがえる木霊』 (小松哲郎 (訳)) 1999 北海道出版企画センター
- 早川昇 『アイヌの民俗』 1970 岩崎美術社
- 藤村久和 「樺太アイヌの創世神話」 『創造の世界』 87 : 6-23, 1993 小学館
- 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会 (訳) 「B. ビウスツキ／樺太アイヌの民話 = 26」 『創造の世界』 77 : 138-145, 1991 小学館
- 山田伸一 「日露戦争前後の海豹島 (チュレニー島)」 『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告—』 53-68, 2010 北海道開拓記念館
- Batchelor, John. "Specimens of Ainu Folklore I-VII." In : *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 16 : 111-150, 1889 Tokyo : Hakubunsha
- Batchelor, John. "Specimens of Ainu Folklore VIII-IX." In : *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 18 : 25-86, 1890 Tokyo : Hakubunsha
- Batchelor, John. "Specimens of Ainu Folklore X-XII." In : *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 20 : 216-227, 1893 Tokyo : Hakubunsha
- Batchelor, John. *The Ainu and their Folk-lore*, 1901 London : The religious tract society
- Batchelor, John. *Uwepekere, or, Ainu Fireside Stories*. 1924 Tokyo : Kyobunkan
- Batchelor, John. *Ainu Life and Lore ; echoes of a departing race*. 1927 Tokyo : Kyobunkwan
- Batchelor, John. *Appendix to the third edition of Dr. Batchelor's Ainu Dictionary*. 1932 Sapporo
- Batchelor, John. "Steps by the Way." In : Refsing, Kirsten (ed.) *Early European Writings on Ainu Culture; Travelogues and Descriptions* 5. 2000 Tokyo : Edition Synapse
- Chamberlain, Basil Hall. "The language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies." *Memoirs of the Literature College, Imperial University of Japan*, no. 1. 1887 Tokyo : Imperial University
- Chamberlain, Basil Hall. *Aino Folk-Tales*. 1888 London : Privately printed for The Folk-Lore Society
- Pilsudski, Bronislaw. *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. 1912 Cracow
- Refsing, Kirsten (ed.) *The Ainu Library. Early European Writings on the Ainu Language*, vols. 1-10. 1996 Tokyo : Oxford University Press

(さかぐち・りょう／千葉大学大学院博士後期課程)